

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年 6月 8日	
所属部局・学年	野生動物研究センター 修士1年
氏名	小川あゆみ

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市 幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2023年5月15日 ~ 2023年5月21日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学幸島観察所 技術職員 鈴木崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の野生動物・行動生態野外実習では、2日にかけて幸島での野生のニホンザルの行動観察を行った。今回の実習を通して、動物の行動だけでなく野生動物のフィールドワークを行う上で気をつけるべき点も学ぶことができ、実りのある実習となった。
○スケジュール 5/15 幸島観察所に到着 幸島での観察の準備 5/16 幸島に渡りニホンザルの観察 5/17 幸島にてニホンザルの観察 5/18 幸島観察所に戻り、幸島での実習の片付け 5/19 都井岬にて野生馬の観察 5/20 都井岬にて野生馬の観察、幸島実習の報告会 5/21 片付け、帰宅
○成果 ●幸島における実習 宮崎県串間市の沖合200メートルにある周囲4kmの無人島である。 幸島には5/16~5/18の3日間滞在し、2日間に渡り午前中にニホンザルの観察、午後には山の散策を行った。 ・ニホンザルの観察 ニホンザルの観察はオオDMの浜にて麦の給餌が始まってからサルが山に戻っていくお昼過ぎまで行なった。幸島のニホンザルには観察している私たちや観光客を警戒するそぶりはあまり見られず、近くまで来て麦を採餌する所を観察することができた。ニホンザルの個体識別は非常に難しく、指が曲がっている個体や、他の個体よりもガタイが良いまたは悪いなど、明らかに他の個体とは異なる特徴を持っている個体のみしか識別することは出来なかった。ニホンザルは、麦の給餌が始まってからしばらくは頭を地面につけながら麦を食べていた。麦の数が減ってくると手づかみで食べ始める個体や岩場の方へ移動しグルーミングを始める個体が見られた。私はグルーミングの観察をする中で、グルーミングの始め方に大きく2パターンあることに気づいた。ひとつめはグルーミングの受け手となる個体Aが個体Bにグルーミングを催促して始まるパターン、ふたつめはグルーミングを施す側である個体Aが個体Bに対してグルーミングを始めるパターンである。これらのグルーミングの始まり方の違いによってその後のグルーミング時間や役割交代の頻度に差が生まれるのか、また血縁関係の有無によっても違いが生じるのかと言う点に注目し観察を始めた。結果としては、受け側の催促によって始まった場合、血縁関係のない個体間のグルーミング時間は血縁関係のある個体間のグルーミング時間に比べると短いケースが多かった。反対に施す側によって始められたグルーミングの継続時間については、グルーミング関係の有無にとって明確な違いは見受けられなかった。ニホンザルは、血縁関係の有無以外にも、その個体の群れの中における地位の高さによっても見られる行動がことあり、観察していて非常に面白かった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図1：オオDMリで麦を採餌するニホンザル



図2：グルーミングする親子

・幸島における山での散策

午前中にオオDMリの浜で麦を食べていたニホンザルだが、麦がなくなってくると山へ帰り始める個体が多く、午後に砂浜でのニホンザルの観察が難しいため、午後は2日間とも山を散策した。砂浜とは違って変わって、サルは群れではなく個体ごとに行動していることがほとんどらしく、山のなかではニホンザルを見かけることは非常に稀であった。山の中での野生動物の観察がいかに難しいかがよくわかった。散策していると、タヌキのため糞を数カ所確認することができたが、実際にタヌキの姿を確認することはできなかった。また、山の中ではかつて人が炭を作っていた形跡や杉を植林していた名残など、かつての人の生活の営みを肌で感じることもできた。

●都井岬での野生馬の観察

都井岬へは19日の午後と20日の午前中に訪れた。初めて群れで生活する馬をこの目で見る事ができ、非常に感動した。また、生後間もない子馬や馬の交尾も見ることができ、非常に貴重な経験をする事ができた。都井岬の野生馬の重層社会の研究している前田玉青氏に、馬の群れの特徴や都井岬とポルトガルのアロガ山に生息している馬との特徴の違いなど、1人で馬を観察するだけでは学ぶことができないことを色々教えていただくことができた。また、実際にドローンを使用して上空から馬の群れを観察する様子も見学することができた。馬の識別もニホンザルと同様識別が難しかったが、番号が押されている個体に関しては、照らし合わせて識別することができた。御崎馬の中には、栗色の毛色をした馬や一部が白色の毛色をした馬を見かけた。それらの毛色は戦後に短期間いた外来馬との交雑によって生じたようで、そういった毛色を持つ馬は外来の遺伝子を後世に残さないために、去勢の対象になっているのだと聞いた。年に一度馬を柵に閉じ込めて健康診断や対象馬の去勢を行うが、そのような馬追の時期になると山に隠れてしまい、何年間も逃げおおせている馬もいるらしい。馬の記憶力の高さや学習能力の高さに驚いた。



図3：群れで生活している御崎馬

●まとめ

今回の実習では観察の対象となった幸島のニホンザルや御崎馬以外にも、イノシシやアナグマまた観察所のアコウの木に実を食べに来たニホンザルなど様々な野生動物を見ることができ、動物の行動観察以外

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

にも様々なことを学ぶことができた非常に実りのある1週間だった。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

本実習で引率をしてくださった杉浦先生、幸島での観察をはじめ様々な場面で手厚いサポートをしてくださった鈴木氏、都井岬で馬の観察のサポートをしてくださった前田氏、その他実習の実施に携わってくださった皆様に深く感謝申し上げます。